

〔書評〕

中西健治著『平安末期物語攷』

安田真一

中西健治氏著『平安末期物語攷』は、『浜松中納言物語の研究』（大学堂書店 一九八三）に次ぐ二冊めの論文集である。前著作から既に十四年の年月が経っている。平安末期の物語を専門とする私自身としては、長い間待たされていた憾がある。

ただし、前著作が『浜松中納言物語』を中心にまとめられた意欲溢れる論文集だったことに比べると、今回の『平安末期物語攷』は、いささか物足りなさを感じずにはいられない。前著作が、中西氏が華々しく文学研究者に名を連ねることとなった処女論文を収め、『浜松中納言物語』を様々な角度から論じていたことを思うと、どうしても物足りなさを感じてしまうのだ。さらには、こうしたことを述べるのは、恐れ多いこととは思いつつも、あえて言わせてもらえば、一書としてのまとまりをあまり感じさせない。

まずは本書の章立てと全体の構成を概観しておく。

第一章 浜松中納言物語 論文五編

第二章 寝覚物語 論文三編

第三章 擬古物語 論文四編

第四章 物語の享受 論文四編

第五章 資料（翻刻）

章立てだけ見れば、本書はタイトルに違わず「平安末期」の物語についてとその享受を論じたものに見えるが、実際のところは、第二章は、中村真一郎・円地文子・津島佑子の小説に関して述べられたものであり、その構成を『夜の寝覚』と比較検討したものである。第三章は、論文四編のうち、一編は、中西氏の教え子である中村則子氏の論文であり、南条範夫の小説と『在明の別れ』を比較したものであり、第二章に収められた論文と傾向を同じくするものである。第四章は、『源氏物語忍草』『源氏物語絵巻』の解題と第五章に紹介翻刻されている新出資料『紀式部集』の解題である。こうしてみると、雑多な論文が一書にまとめられ、ややいじわるな見方をすれば、「平安末期物語」を論じたものと言えるものは、第一章と第三章の一部だけということになる。こうした点からも、一書としてのまとまりのなさを感じるのだが、好意的な見方をすれば、「平安末期物語」の享受やその再生を跡

づけたものと言えるだろう。

第三章 四「鈴木弘道教授の平安末期物語研究」では、中西氏の恩師である鈴木弘道氏の研究の果たしてきた大きな役割が見事にまとめられている。その鈴木弘道氏の著作のタイトルが、『平安末期物語の研究』『平安末期物語論』『平安末期物語研究』など、「平安末期物語」を冠していることからもうかがえるように、鈴木弘道氏が『浜松中納言物語』と「かへばや」中村本「夜の寝覚』『無名草子』などに注目してこられ、平安末期物語の研究を精神的に研究し、かつ、正当な評価への礎を築かれたことを思い合わせれば、中西氏の「平安末期物語」という語を論文集のタイトルに用いたことに対する思い入れのほどは、中西氏の研究の姿勢や「あとがき」などから感じられてくる。

本書を読んで思うのは、以前から感じていたことではあるが、中西氏の研究の姿勢は、煩瑣な検討をおろそかにせず、実直であり、誠実でもあることである。今は章立ての順序にこだわらず、その内容を概観しておく。

まず第四章と第五章について。第四章二・三は、小野高校蔵と春曙文庫蔵の『源氏物語忍草』の解題であり、四は、振徳版本館『源氏物語絵巻』の解題である。いずれも江戸時代に成立したものであるが、『源氏物語』が近世においてどのように享受されてきたのかを示す基礎的な研究であると言える。内容の分析・批評以前に、そのテクスト（作品）の位置付けを私たちはおろそかにしてはならない。こうした基礎的な研究があつてはじめて、

その先の研究があるのだ。書誌学的な位置付けは、本文批判や成立時代などが「解釈」と常に連動するものであるのだから、こうした地道な研究に対して、私みたいな無精な者は常に多くの恩恵を受けており、感謝している。

第四章一は、『紀式部集』の解題と紹介であり、第五章にその本文が翻刻されている。『紀式部集』は、『うつほ』の一あて宮求婚譚に関連する巻のうち吹上上、春日詣、あて宮、祭の使の各巻を対象に、和歌を抜き書きした、歌集の体裁を持つものである。『うつほ』が後年においてどのように享受されてきたのかは、はっきりしていない。そうした意味でも、この『紀式部集』は非常に重要なテクスト（作品）であると言える。『うつほ』というテクスト（作品）自体が、近年発刊された室城秀之編『うつほ物語全』（おうふう 一九九五）によって、整った本文と注釈がようやく提供され、研究の土台ができたところであると言つてよい。最近雑誌での特集（『国文学』一九九八年二月）もあり、ようやく注目を浴びてきた『うつほ』の研究において、『紀式部集』は、後年の享受を示す重要な資料となることは間違いない。

第二章は、『夜の寝覚』についてであるが、既に述べたように、近・現代小説と『夜の寝覚』との構成の比較である。物語はその享受の段階において、改作され、その変容・再生産は常につきまとうものである。瀬戸内晴美や円地文子などによる『源氏物語』や三島由紀夫による『浜松中納言物語』の享受のあり方は今更言うまでもなからう。『夜の寝覚』も近・現代において一つの変容

を遂げ、新たな物語として再生されていたことを、恥ずかしいながら中西氏によつてはじめて教えられた。『源氏物語』を中心にした現代の研究状況では、『夜の寝覚』の小説化などはあまり問題にされないであろうし、近・現代の研究状況においても、中心となるあるいは正典となる作家がおり、三島由紀夫だからこそ、『浜松中納言物語』は注目されただけのことであろう。『夜の寝覚』の変容・再生を扱ったこの三編の論文は、こうした現代の研究状況への批判とも結果としてなるのではないかと、私は思った。ただし、本文と構成の比較検討に終始しており、もう一步踏み込んだ論であつたならばと、残念でならない。(第三章二の、中村則子氏の『在明の別れ』と南条範夫の小説との比較についても同様なことが言えるだろう)

第三章について。三「風に紅葉」について一は、現在刊行中の『中世王朝物語全集』(笠間書院)のうち、中西氏が校訂・訳を担当している『風に紅葉』のために書かれた解説である。弧本である『風に紅葉』の本文校訂の難しさが伝わり、いい意味で新たな(異本)が提供されることになるのであるが、刊行が諸般の事情により大幅に遅れていることは、小耳に挟んでいる。残念でならない。膨大な数にのぼる擬古物語の研究は、今までおろそかにされてきているのだが、その理由の一つとして入手しやすすいテキストがなかったことがあげられる。大いに刊行が待たれる。

もう一編は、一「とりかへばや物語の「人目」について」という高論を収める。第一章に収められている『浜松中納言物語』の

論文にも同じことが言えるが、用例をおさえ、実証的に本文に徴して(読み)(解釈)をしていく手際は、地味だが堅実であり、実直な研究姿勢がうかがえる。こうした手際は、鈴木弘道氏とやはり同一のものである。『とりかへばや』において、「人目を世の常」とすることは、「人目」をあるがままの状態として承認したうえで、これを世間一般の理解に沿わせることであるという指摘は、重要である。さらに続けて、「世間の人々が当事者をどのように見ているのかを客観的に説明するための用法であり、見る側の当事者自身の内面に及ぶことはない」という点も大方首肯できる。ただ、「人目を世の常」にもてなすということは、いかにして世間の人々に「見せる」のかが肝要であるのだから、直接「見る側」の内面に及ぶことはないのかもしれないが、「見る側」の常識的な理解を逆手に取った、つまり、「見る側」の内面を想像することによつてはじめて可能な行為がそれではなかるうか。また、万葉集以来での使用法を前提とし、前代の恋愛の障害として用いられていた「人目」を取り出し、そこに変装を織り込む修辭法を付加したという指摘は、『とりかへばや』が王朝物語の恋愛をパロディー化しているという神田龍身氏の論(『物語文学』、その解体)有精堂一九九二)を思い起こさせ、興味深い。

最後に第一章について。一・五の書き下ろし二編を含む五編の論文を収める。どれも堅実であり、また誠実な研究姿勢がうかがえる。研究においてわからない言葉や解釈のできない表現などがあるのはよくあることである。それを未詳として提示することは

大事なことであるが、それをいつまでも未詳のまま放置することは、研究者として怠慢である。言葉や表現に〈意味〉〈解釈〉を与えるのは、私たちなのである。未詳とされるものに對して、一つの説(意味・解釈)を提示することは、テキスト(作品)全体の構造に及ぶ営みであろう。一つの説(意味・解釈)は決して絶対的なものではない。誤解を恐れずにいえば、未詳のものに對して、絶えざる概念規定を意識的に行ない、一つ一つを克服していくこととする姿勢こそが重要なのであり、意味・解釈を決定(固定)することが重要なのではない。その意味で、「わうかくしやう」「かうそう」「てんふ」などの解釈困難な言葉に對して、一つの〈読み〉を提示している点は高く評価されなければならない。

また、一「浜松中納言物語卷一の冒頭文」では、「本来存在したとおぼしい首巻が散逸した以後においても現存の巻一から始まる物語として鑑賞し馴染んできた事実を軽く扱うべきではなからう」と述べ、現存本巻一の冒頭表現の「孝養の心ざし深く思ひ立ちにし道」が中心的主题となることを論じ、藤原定家を含め、現存本巻一を冒頭として読んできたこと、またそう読めることを示す。

確かに私たちは、早くに失われた散逸首巻ではなく、現存本巻一が冒頭として読まれてきたであろうことを無視すべきではない。また、確かに現存本巻一は、冒頭表現として読むことができるのであるが、それは多くの物語の巻々の巻頭が、自立した表現であることを思えば、当然のことではないのか。特に、『浜松中

納言物語』の場合、散逸首巻においては日本が舞台であり、現存本巻一が唐土の出来事から始まるのであるから、ストーリーが新たな局面を迎えており、冒頭表現が自立して読めるのも多くの物語からして当然のような気もするのだが、いかがか。現存本巻一の表現の主題性を否定するのではなく、首肯しつつ、あえて述べていることは断つておきたい。

さらに言えば、物語の約束ごととして、語り手の伝聞形式を物語の始まりと終わりは持っている。『狭衣物語』や『夜の寝覚』にしても、主人公の系譜が冒頭近くに語られている。『浜松中納言物語』の現存本巻一にはそれが無いのだ。そして、現存本巻五巻末は、伝聞形式であることを明示しない形で物語を締めくくる。私は、そのこの意味が案外大きいのではないのかと考えているのだがどうであろうか。『浜松中納言物語』の現存本は、あえて言えば、その物語形式として、始まりも終わりも画期的な形式であるのではないか。俗っぽく言えば、カッコイイのである。少なくとも、巻五巻末は、物語の締めくくりとしてふさわしいと思ふし、現存本巻一の表現にしても、冒頭文としてふさわしいと思ふのだが、そこに残された問題は無視しえないものである。「定家がさほど疑問を抱かず、物語の冒頭として理解していった」ということは、その文章の切り出し方において、物語全体の開巻にふさわしいものがあつた」とみるのは、定家をあまりに信用しすぎている研究の現状を、無批判に受け入れてしまっているように感じられてならない。

他に第一章に収められた三編の論文について述べておこう。三は、巻五掉尾の唐人からの手紙が「日記」形式である点に注目した緻密な論であり、「日記」と表現されている意味を改めて考えさせられるものであった。四は、江戸時代の国学者が『浜松中納言物語』をどのように研究してきたのかを、『浜松中納言物語目録』と『浜松中納言物語類標』によって論じた緻密な論文。五は、『権中納言実材母集』と『浜松中納言物語』との関係を一首一首詳細に分析した高論。『浜松中納言物語』の享受史の一面を照射する論であり、今後『権中納言実材母集』と『浜松中納言物語』の研究双方において、参照されるべき論文となるであろう。さらに言えば、『権中納言実材母集』を（読む）ことによって、物語全般が、どのように享受され、また文学的営みの中に消費されていったのか、それを私たちが仄見できる可能性を示している。

全体を通してみると、最初に述べたように、一書としての体裁を整えていないし、「平安末期物語」と冠することに深い疑問を持つことになるのだが、一つ一つの論文は、それぞれ意義深いものである。また、中西健治氏の詳細・緻密な論、堅実かつ実直な研究姿勢には学ぶことが多い。拙い書評であり、あえて苦言を呈したところもある点は深謝。

（勉誠社 一九九七年十一月 三六〇頁 本体一一〇〇〇円）

（やすだ・しんいち 本学大学院博士後期課程）